



国民の森林・国有林

## 令和元年度 第1回国有林材供給調整検討委員会を開催



遠藤日雄委員長を座長に検討会の様子

6月25日に、本年度第1回目「国有林材供給調整検討委員会」を開きました。

各委員がそれぞれの専門分野からの意見を述べあい、「現時点での供給調整は要しない」との検討結果とな

りました。各委員からの主な意見は次のとおりです。

○合板の原木入荷は順調に推移し、原木在庫量も約3ヶ月分を確保しており、合板工場もフル稼働で原木を消費している。現在、必要最小限度の外材消費率で原木を消費しており、今年の秋頃にはオール国産材を目指している。

製品の動向は、住宅着工戸数も毎月上下しているが、年間を通せば昨年比ほぼ横這いで推移している。

中国向けの古紙の輸出が減少していることから古紙の単価が落ちている。また、中国政府が「もう日本から古紙を輸入して紙を作るような事は止めたい」との方針を示しており、国内の古紙価格は暴落と言えらるる厳しい状況である。

製品の動向は、住宅着工戸数も毎月上下しているが、年間を通せば昨年比ほぼ横這いで推移している。

○原木の出材、流通は非常に活況というか元気がいいと感じている。

製品に関しては消費増税により過去の体験から動きが良くなる期待感もあったが、前回に比べれば駆け込みもなければ反動も和らいだものとなると思われる。秋口の動きに期待したい。

製品の輸出に関しては、原木も製品も輸出したものが加工されてまた日本に戻ってくるブイラン輸出なども有り、統計の取り方をそろそろ考えるべき時



挨拶する原田局長

宮崎では直納での入荷が増えており、市場での単価が本場の単価なのかと考える時期に来ている。

○国産材需要は増えており、九州各地の大型工場が稼働率を上げてくる状況。安定供給システムも価格が安定し販売、供給ができています。

しかしながら、まだ川上と川



別室でのウェブ中継の様子

下の情報共有が不十分なところもある為、市場ニーズによる有利採材等を含めた情報共有が必要である。

九州全域で請負事業者の不足に加えトラック、運転者不足も深刻で山に丸太はあるがトラックが回らない状況。

○山に材はあるがトラックが取りに来れず安定供給に支障が出ているというような話もあり自社ストックヤードにはかなりの量が集まっている。納材しやすい環境を作ることが必要。

今後は森林経営管理法の施行もあり「木を伐る」事に対して様々な注意を払う必要がある。「伐採」から「樹木採取」へと表現が変わってきており森林環境譲与税も今年から前倒しで使われる事などからこれまで以上に世間の目が厳しくなってきた。

素材生産業者は増加傾向にあるがどれだけの数が諸問題に対応し生き残れるかが課題。  
○市場での取扱量が今年度はこれまでで最高になるのではないかと状況である。価格が暴落したときに数量が大きく落ち込んだ経験もあるので、大きな需要先が増えてくるのはありがたい話。

買い手の動向は大型工場の買入気が強く応札も多いが地元中小工場は手持ちが多いようで虫害も考えて応札している印象。輸出用材は中国向けが弱含みだが量は変わらず商社が買っていく。台湾・韓国向けは価格も量も変わらない。

※本検討委員会は、九州森林管理局HPの注目情報「九州森林管理局国有林材供給調整検討委員会の検討結果等について」からご覧になります。  
(担当：地域木材情報分析官)

## 生産性向上 検討会を開催

【宮崎森林管理署・大分西部森林管理署】7月25日から26日にかけて大分西部森林管理署と宮崎森林管理署合同による「生産性向上に向けた日報管理の取組み検討会」を、局署職員21名、5事業者15名参加のもと開催しました。



現地検討会の様子

一日目は、九州森林管理局の石神智生地域木材情報分析官より、生産性向上に向けた取組みや日報に基づく分析手法などについて講義を受け、次に、久大林産(株)の工藤洋一代表取締役から、日報管理とスケジューリング・マネジメントによる効率化と題して、従業員自ら作業日報を作成し工程を考えた作業を行うよう会社教育に役立てていることや、機械の稼働データを蓄積することで稼働状況の分析やメンテナンスの時期を把握して故障を防ぐなど高効率な工程管理を会社全体で行っている優良事例が紹介されました。

その後、4班に分かれて日報や功程分析資料に基づく生産性分析についてグループ討論し、人員配置の問題点や路網作設技術・人材育成の重要性など様々



グループ討論の様子

な意見が発表されました。

二日目は、久大林産(株)が実施している森林整備事業(保育間伐【活用型】)請負箇所の「フェラバンチャージャー」を導入による低コスト・効率化を図った路網作設を視察、効果的な設備投資や人員配置、作業工程の組み合わせなどについて意見交換を行い、改めて「生産性」を通じた作業分析の重要性や人材育成の必要性について考え直す貴重な機会となりました。  
今後も、引き続き生産性向上に向けこのような検討会等を開催し、取組みを進めていくこととしていきます。

## 大型製材工場・ 原木輸出を学ぶ

【宮崎南部森林管理署】7月18日、当署職員の資質の向上を図るため志布志市にある外山木材株式会社志布志工場及び志布志



志布志港での丸太の積込作業の様子

港を訪問し学習しました。  
まず、外山木材株式会社志布志工場において、スギの中目材をツーバイフォー部材及び足場板に加工している製材工程を視察し、将来的にツーバイフォー部材は志布志港から海外へ輸出したいとの説明を受けました。  
次に、9年連続原木輸出日本一の志布志港において、鹿児島県・宮崎県木材輸出戦略協議会の会員である南那珂森林組合の河野道貴部長から主にスギは中国に輸出され棺桶や梱包材に加工されるとの説明を受けました。国内で需要の少ない大径材や低質材が輸出されており、棲み分けが出来ていることを学びました。  
この学習会を通じて、スギ材の需要の高さを感じるとともに、この需要に対応するため安定的に木材を供給していきたいと考えています。

# 令和元年度 第一回屋久島世界遺産地域科学委員会及びヤクシカ・ワーキンググループ会議を開催

7月9日・10日、今年度第1回目の屋久島世界遺産地域科学委員会と同委員会のヤクシカ・ワーキンググループ（WG）の会議が屋久島町環境文化村センターにおいて開催されました。

9日のヤクシカWGでは、開会にあたり九州森林管理局井口真輝計画保全部長から「ヤクシカの捕獲頭数はピークの約半分となっているが、捕獲従事者が減っているため、生息数が減少したかどうかは慎重に見極める必要がある。また、森林生態系の管理目標については、昨年度4つの目標を設定することについて合意をいただいたので、今後はその目標の達成状況などを把握するための指標などについて固めていく必要がある。これらは、今後の保全管理のあり方の根幹に関わるので慎重に議論いただきたい」と挨拶。

その後、事務局から昨年度の取組結果及び今年度の取組内容が報告され、委員からは「シカ生息密度調査は調査方法によってデータが異なっており継続調



会議の様子

査が必要」「林道沿いでの目撃情報が少なく、生息域の奥地化が進んでいるのではないかと」「捕獲従事者の確保が重要であり、行政機関の課題として対処したい」などの意見が出されました。

10日の科学委員会では、各種モニタリング調査、山岳部利用のあり方や高層湿原保全対策などについて昨年度の取組結果や今年度の取組内容の報告、今後

の屋久島世界遺産地域管理体制及び管理計画についての提案を行うとともに、屋久島町から5月の豪雨災害の検証報告がありました。

委員からは「高標高域でのヤクザサやシャクナゲの食害は、山奥の植生に大きな影響があるので、引き続き注意してモニタリングしてほしい」「大雨の際、山岳地のリアルタイムの雨量データが把握できるようにし、登山中止や避難の判断に活かせるようなシステムの構築が必要」など活発な意見が出されました。

九州森林管理局では、こうした意見を踏まえながら、引き続き、関係機関と連携して屋久島世界遺産の適切な保全管理に取り組んでまいります。

（担当：計画課）

## 菊池市・大津町地域の運営会議を開催

【熊本森林管理署】7月11日、当署会議室において、菊池市・大津町地域森林整備推進協定運営会議を協定者である熊本森林管理署、菊池市、大津町、菊池森林組合の関係者、さらに本年度からオプサーバーとして熊本県東北広域本部林務課長等も参加して19名で開催しました。

会議は中嶋紀光森林技術指導官の司会進行により、冒頭川畑充郎署長が協定者を代表して挨拶を行った後、各協定者から平成30年度の取組実績、令和元年度の取組予定の報告・確認が行われました。

また、本協定は協定期間が本年度末で終了することから協議の結果、協定を継続することで承認が得られ、本年度中に具体的な次期の実施計画の作成を行っていくことになりました。

最後に、当署及び九州森林管理局の本年度の重点取組事項等の情報提供を行うとともに、苗木生産等の地域の林政課題について活発な意見交換を行い、運営会議を終了しました。



運営会議の様子

## 餌肥分収造林組合連合会 支部総会で基調講演を実施

【宮崎南部森林管理署】分収造林面積が6200haと全国一位を誇る当署管内において、7月12日、18日に餌肥分収造林組合連合会の北郷支部及び日南支部の総会が開催されました。

総会には、それぞれ約50名の会員の方々が参加され、井上隆裕署長は、造林者の皆さんの労をねぎらい、今後とも適切な販売に努める旨の来賓挨拶を行いました。

その後に基調講演として、郷原寛美森林技術指導官が最近話題の林分密度試験林（通称：木



基調講演を行う郷原森林技術指導官

のミニテリーサークル)の経過報告を行いました。

内容は46年前の社会情勢の変化により、木造船からプラスチック樹脂の船に変わったことに伴う弁甲材から建築材用の丸太生産のため、オビスギが疎植造林から密植造林へ対応できるかの試験地であり、結果として十分な対応力があつたことが証明された旨の話を行いました。

参加者からは、「林分密度試験地がオビスギの良さや歴史を残すものであり、後世に残してもらいたい」などのご意見をいただきました。

当署としても、今後も分取造林組合の皆さんと連携し国有林の森林整備に努めていきます。

## 安全大会で救急訓練と交通法令講習を実施

【福岡森林管理署】7月4日当署において安全大会を開催しました。

午前は福岡市消防局救急課(救急救命士)2名を講師に迎え、救急法講話を実施し職員が参加しました。講話では、救命処置の手順について講義を受け、参加職員全員が練習用マネキンを使い、胸骨圧迫を実施しました。

また、AED(練習用)の使

用方法を学ぶなど、各職員は緊張感をもって真剣に取り組んでいました。



練習用マネキンで胸部圧迫を実施

午後からは、福岡県早良警察署警部補を講師に招き、交通安全講話を受けました。福岡県における交通事故の現状や交差点における交通事故の事例、飲酒運転の検挙数などについて講話を受けました。

また、酒酔い体験ゴーグルを



酒酔い状態を疑似体験する職員

つけ、飲酒した状態の模擬体験を行い、飲酒の怖さを実感しました。

当署では、人命尊重を基本理念とした救急法の大切さ、安全運転の励行と交通安全の絶滅に取り組むことを確認し、安全大会を終了しました。

## 令和最初の安全大会を開催

【西都児湯森林管理署】7月5日、西都市民会館において、全職員参加のもと、令和元年度西都児湯森林管理署安全大会を開催しました。

はじめに、鶴山道弘西都児湯森林管理署長から、平成23年10月20日から無災害を継続しており、「重大災害0(ゼロ)の維持」「災害件数0(ゼロ)の維持」「通勤災害0(ゼロ)の維持」の達成に向け、引き続き、職員一体となって安全活動の推進・継続を取り組んで行こうと挨拶。挨拶のあと、原田隆行九州森林管理局長からのメッセージを白濱正明次長が代読し周知を行いました。

続いて、毎年白熱している安全標語の入選発表が行われ、61作品の応募の中から職員から多くの共感を得た10作品が選定され、非常勤職員南理恵さんの

「見たつもり、やったつもりが大災害ヒヤリハットの確認大事」が最優秀作品に選ばれました。

今回、入選した作品については、毎月の健康安全目標として活用しています。

続いて実施した救急訓練は、「災害時における防災ヘリの活動について」と題して宮崎県防災救急航空センターから増田隊長を講師に招き、災害時における防災救急ヘリコプターの活動について講義をいただきました。

講義では、宮崎県の地理的特性を踏まえ、防災救急ヘリコプターが導入された経緯の説明を受け、山での遭難者を救助する映像や林業事業体の事業箇所での災害発生時の救助活動の映像などを視聴し、その中ではヘリコプターの風圧により立木が倒れることによる二次災害(ダウソウオッシュ)や、集材用の架線が支障となりヘリコプターによる救助が難しくなるなど、山での救助の難しさを学びました。

また、増田隊長からは、安全に向けて過去の災害事例を検証すること、基本的なことを怠らないことが大切であると熱いメッセージがありました。

午後からの交通法令講習は、西都警察署から櫻田地域交通課長、金田交通係長、福岡巡查部長の3名を講師に招き、「動画KYT」と呼ばれる映像を見な

から事故の危険予知体験ができる機器を用いた体験型講習(危ないと感じたところでボタンを押す)があり、その中には「生活道路では何が起こるかわからないことから、常に気をつけて運転する必要がある」ことや「複数の要素が同時に重なる」と片方がおろそかになり、事故を起こしてしまう」ことなどを、体験しながら学ぶことが出来ました。

交通法令講習の締めくくりとして、新ヶ江颯技官から「交通安全宣言」を読み上げ、愛する家族を守るために交通安全の遵守を櫻田地域交通課長に宣言しました。

最後に、坂本雄二札之元首席森林官が「安全大会宣言」を読み上げ、労働災害のない、安全な職場づくりに向けて署・現場一帯となって推進していくことを職員一同で確認しました。



動画KYTを実践する様子

# ナイストライ事業で国有林の職場を体験 中学2年生を職場体験学習で受入れ

当局では、7月9日から11日にかけて熊本市立北部中学校から依頼を受け、「ナイストライ事業」(注1)による中学2年生5人を受け入れ、国有林及び九州森林管理局の業務について職場体験学習を行いました。



国有林ってどんな仕事？

今回の職場体験では、初日に総務課篠村和希課長補佐から国有林及び当局の業務内容の説明を受けた後、収穫調査の方法や調査器具の説明、測量業務について、甲斐孝生広報主任官より

講義を受け、広報業務について体験学習しました。

2日目は、九州森林管理局構内において佐伯卓也専門官の指導のもと、コンパス測量を実習した後、監物台樹木園に移動し、昨日学習した収穫調査器具を使用して、胸高直径・樹高の計測を体験しました。特に、バーテックスを使用した測樹に興味を示し何度もチャレンジしていました。

その後、樹木園内の「みどりの交流館」において、樹木図鑑の使い方や、シカの被害について「シカカード」を教材に用いて学び、森林教室の進め方につ



バーテックスって便利だなー

て学び、森林教室の進め方について学習しました。3日目は、3日間の振り返りや、学習したことをまとめる作業を行い、原稿作成にチャレンジ、生徒たちは、四苦八苦しなながらも、「広報誌ナイストライ」を作成し、3日間の職場体験学習を終了しました。



「広報誌 ナイストライ」を作成する生徒

のコメントがあり、貴重な体験を提供できた職場体験学習となりました。(注1)「ナイストライ事業」とは、熊本市教育委員会が中学2年生の体験学習として実施するもので、実際の職場で学習する体験のない生徒たちに、働くことの意義や役割を理解し、望ましい職業観・勤務観を育成することなどを目的に行われている事業です。(担当)総務課

## 森林セラピー協議会の総会を開催

【宮崎南部森林管理署】令和元年7月26日に、日南市北郷町の林研グループ、グリーン・ツーリズム代表ら森林セラピー関係者、日南市及び南那珂農林振興局の担当者が集まり森林セラピー協議会の年次総会が開催されました。

森林セラピー協議会の席上福岡浩一会長から、昨年度は8月に日本蕨苔類学会から「日本の貴重なコケの森」への認定や9月に「猪八重照葉樹林生物群集

保護林」に指定されるなどの紹介があり、今後とも力を合わせて森林セラピー基地の発展を図っていくことの決意表明がありました。



決意表明をする福岡会長

当署から委員として出席した井上隆裕署長は、科学的エビデンスに基づく森林浴の効果やリハビリテーションのための効果的なメニューを確立することにより、森林へのふれあいを増進できる取組事例や森林内の樹木がお互いに情報交換していることが解明された最新の科学情報を紹介しました。

出席した各委員からは、猪八重溪谷の貴重な森林を守りながら癒しの場として保護と観光の両立を図って行こうという意見が出され、当署としても猪八重溪谷の保護と学術研究の場として地域と一体となって魅力ある国有林を目指します。

## 鹿児島大学から 研修生を受入れ

【鹿児島森林管理署】鹿児島大学からの依頼を受け、7月26日農林環境科学科森林科学コースの三年生27名を対象に桜島地区民有林直轄治山事業の現場において研修会を開催しました。

当日は、湯平展望所において久保田修次長から国有林、鹿児島森林管理署の概要、古庄誠司総括治山技術官より桜島地区民有林直轄治山事業、江口晃主任

治山技術官より治山事業の主な工法について説明を行いました。その後、引の平上流円形セルダム施工箇所へ移動しセルダムの特徴である、コストの削減、工期短縮、現地土砂の有効利用等について説明を行いました。

多岐にわたる説明に対し熱心にメモをとる学生もおり今回の参加者の中から1人でも多くの学生が我が職場を希望されることを期待して研修を終了しました。



円形セルダム施工箇所での研修の様子

## 種子島木材 フェスタに参加

【屋久島森林管理署】7月7日、種子島西之表市にて「第1回種子島木材フェスタ」が開催されました。これは熊毛流域森林・林業活性化センターが主催となり、木材への理解を深め、その普及を通じて、木材や島産材の需要拡大及び業界の活性化を図ることを目的として計画され、当署も協賛として参加しました。当日は西之表森林事務所のア



開会式の様子

南達也首席森林官外4名が参加し、竹とんぼ作り、もっくん作り、ロケットラフン、種の模型飛ばしキットを用いて木工教室



# 砂漠の緑化体験を通して

25年ほど前、当時私は九州から東京へ転動して単身赴任生活



## 小野 健一さん

をしていた。初めての都会暮らし、毎日の通勤フッシュと緊張で心も身体も疲れ果てていた。そんなある日、『砂漠に緑を!』というスローガンを掲げた環境保護団体の中国大陸での砂漠緑化参加者募集のチラシをみかけ、心身をリフレッシュしたい気持ちから早速応募し、ボランティアの一員に選ばれることができた。

植林場所は北京から西に千キロ近く離れた内陸部の

内モンゴル自治区クブチ砂漠で、

一日の寒暖差が激しく冬季は土が凍り作業ができないという過酷な環境の地で6日間の緑化作業に従事した。日本国内では到底見ることのできない果てしなく続く茶色の砂漠風景と夜空の無数の光輝く星に感動したことには鮮明に記憶に残っている。植林作業の最終日、自分の名前を記入したプレートを苗木に括り付け、いつか必ず自分が植えたこの木の成長と砂漠の緑化した姿を見届けに戻ってくるぞと心に誓った。

帰国後は日々の仕事に追われ、その後も転動で九州各地を回っていたが、3年前中国に渡航する機会があり砂漠での植林活動を思い出し、再びクブチ砂漠を訪れて成長した木々の姿を確認しようとした。しかし、訪中時期が初春であったこと等から砂漠に再訪することは叶わず、大変残念な思いでいた。

その後、環境団体の主催する九州各地の自然と人間社会の共

生を目指した森づくりに参加し、植樹や森林再生ボランティアに取り組んでおり、今年も宮崎県綾町で10月に行われる植林活動への参加を予定している。

日本各地で発生する土砂災害や流木による甚大な被害発生ニュースを聞くたびに、森林の大切さと有難さを感じており、子どもや孫たちに多様で健全な森を残すことが私たち世代の責務だと思っている。国有林モニターとして、「国民の森林」の果たす役割と九州森林管理局の先進的な取り組みについてさらに理解を深めたい。

(大分市在住)

を開催しました。天候にも恵まれ、約500人の家族連れや観光客で賑わい、会場がスーパーマーケットの駐車場であったため、買い物ついでのお客様にも興味を抱いて頂き、多くのお客様がひっきりなしに訪れました。



大盛況の屋久島署のブース

当署のブースにも多くの親子が訪れ、職員の指導を受けながらモックンや竹とんぼを製作し、作った竹とんぼを楽しそうに飛ばしていました。また、モックンにサンプルで書いたキャラクターの絵に興味を惹かれた子供も大勢集まり、ランドセルに着けるキーホルダーにする等大人気でした。完成品を手にした時は親子共々笑顔でお礼を言ってくださり、こちらも非常に嬉しくなりました。最後に特設ブースからの餅まきを行い、種子島木材フェスタは無事終了しました。

た。

熊本流域森林・林業活性化センターでは、種子島の木材がPRできたとして、次年度以降もフェスタを続けることとしています。

## 2019竜門ダムフェスタに参加

【熊本森林管理署】7月28日、熊本県菊池市の竜門ダムエントランス広場において、斑蛇口湖活性化推進協議会主催による2019竜門ダムフェスタが開催され、当署からも8名の職員が参加し木工体験ブースを出展しました。



こちらも、大盛況の熊本署のブース

フェスタ当日は炎天下の中で、オープニング前から多くの親子連れなどが訪れ、当署の木工体験ブースでも、職員指導のもと丸太切りを行い輪切りの木片を

用いてペンダント作りを楽しんでもらうとともに、当署の取組などまとめたPR用リーフレットを配布するなど、職員は汗だくになりながら対応し約140名の来場者があり終日賑わいました。

体験した親子からは、「丸太切りやペンダントを作ったのは初めてで大変だったけど、とても楽しかった」などの感想を頂き、参加された方々と触れ合いながら国有林や木材の利活用をPR出来ました。

当署では、今後とも地域の各種イベントに積極的に参加して国民の森林・国有林をPRするとともに、森林や木材について興味を持って頂けるよう努めていく考えです

## 有害鳥獣捕獲研修を受講

【宮崎南部森林管理署】宮崎県南部に位置する当署は、シカが生息していない地域と言われていましたが、近年、国有林内の自動カメラにオスジカが撮影されるなどシカの侵入が確認されています。

その対策として、職員が有害鳥獣捕獲に従事できるよう毎年研修会を開催しています。

7月9日には、職員9名が鳥獣保護管理法の理論や笠松式く

くり罠の実習を内容とする有害鳥獣捕獲研修を受講しました。



郷原森林技術指導官による講義の様子

当日の受講生は、森林官、森林技術員などシカ捕獲のベテランから新規採用者まで幅広い層の職員が郷原寛美森林技術指導官の講義を熱心に受講していました。

今後、管内の主伐・再造林地にシカによる森林被害が発生した場合、速やかに効率的な罠の設置に取り組みしていきます。

## 人のうごき

☆8月1日付異動

林野庁国有林野部管理課課長補佐（総務班担当）

勝沼太志【企画調整課長】  
企画調整課長

成瀬昌弘【林野庁国有林野

部経営企画課付】

（担当）総務課

## 「労働災害ゼロの職場を目指して」安全パトロールを実施

【大分森林管理署】7月9日、臼杵市野津町に所在する間戸国有林72林班内で実行中の森林整備事業【活用型】（受注者：大分愛林（有）代表取締役 川野豊晴氏）の安全パトロールを坂本和隆大分森林管理署長、植薄和彦森林技術指導官、堀田信広首席森林官3名で実施しました。

当日は、受注者の川野代表取締役のほか4名の方が作業中で労働災害ゼロの職場を目指し、安全意識の向上、危険因子の摘み取りに取り組むことを確認しました。

はじめに、坂本署長から①伐倒作業に係る安全確保、②足下の確保と周囲確認、③作業者間の連絡・合図の徹底等、基本的事項等の遵守について発注者の立場から周知。また、平成30年度請負重大災害の被災の作業区分から、集材（2件）、伐倒（4件）、造材（1件）、合計7件の概要を説明し類似災害の防止に努めていただくよう周知しました。

堀田首席森林官（監督職員）から、ダニ刺咬防止対策について、作業前後の服装のチェック、刺された場合は速やかに受診するように説明しました。



安全パトロールの様子

## 「ツ葉の森林の守り人 「取締監視員」を委嘱

【宮崎森林管理署】7月1日、当署において、一ツ葉海岸林において取締監視員活動を実施して頂くために、地元、檜（あおき）振興会へ取締監視員委嘱証明書（委嘱）の交付式を行いました。（委嘱期間は一年間（令和元年7月1日～令和2年6月30日））この活動は、宮崎市の前浜国

有林周辺において海岸林の保全管理を目的に、ゴミの不法投棄や松の不法採取等を監視する活動を平成12年度より実施して頂いているものです。

檜振興会は、海岸林に隣接する地元住民で構成されており、県民の憩いの場・レクリエーションの場として親しまれている一ツ葉海岸林の監視活動のほか、自主的な松の植栽や保育を行うなど海岸林の育成にも積極的に取り組まれています。



取締監視員の委嘱を受けた方々

川野代表取締役からは、日常の作業で取り組んでいる連絡・台図の取組状況、伐倒作業に使用するクサビの使用状況、朝のミーティングや危険予知活動の実施などについて説明を受けました。

なお、4月から就業している平成30年度「おおいした林業アカデミー」卒業生2名の姿もあり、川野代表取締役と話聞いたところ、現在、主に伐倒、造材を行っており、伐倒作業では実践を重ねていく中で思った方向へ伐倒できるようになってきたと話し、日々変化する現場環境に対応できる技術を早く身につけてもらいたいと期待を寄せました。



ツブラジイが群生しているところでは、春、花が咲く頃、独特の匂いがします。これは虫媒花であることから蛾や蝶を引き寄せるための戦略なのです。

ツブラジイの名前は、ドンク



141

## ツブラジイ(ブナ科)

リが丸いことから「円」ジイと呼ばれ、イタジイに対してドンクリが小さいことから「コジイ」の名前もあります。

私は小さい頃、近くの里山でドンクリ（ツブラジイ）を拾っておやつ代わりに食べ、集団就職していた姉へも送っていた頃がありました。

ツブラジイは、40年生前後から樹芯が腐れ始め100年生前後で倒れ腐れる、寿命の短い樹木です。

イタジイとの区別は、樹皮の変化、小枝や葉の形でもできますが大変むずかしいです。



ドンクリの形状が一番です。夏場でも樹下を探すと、虫はドンクリの皮までは食べませんので、その皮を見つけないことで正確な判断ができます。

私の経験からツブラジイの分布域は耐寒性があり内陸部（人吉・大口など）に、イタジイは沿海部（天草・肝属半島）の暖かい森に多いようです。

### 森林インストラクター

安条 行雄



令和時代が3ヶ月余り過ぎ、前時代とは違う出来事が目立つようだ▼今年の入梅は観測史上最も遅い日となった▼近年の猛暑日が続いた異常気象等が原因か・▼高齢者の悲惨な車両事故も頻発した▼高齢者時代の運転資格条件を考える時期にきているのでは・▼京都アニメーションの放火事件も心を痛める、アニメーターを主人公とする「なつぞら」のヒロインと状況がダブリ残念な行為に憤りが積る▼犠牲者の方々から冥福を祈りたい▼東京オリンピック・パラリンピック2020の開催まで1年を切った▼スポーツ好きの方々には、この機会を十分に堪能してもらいたい▼今年度から、「森林経営管理制度」が導入され、民有林と連携し、意欲と能力のある林業経営者に安定的な事業量を確保する制度がスタートした▼川上から川下までの林業、林産業を活用し、積極的に森林整備が促進されることは喜ばしいことだが、国民の財産である国有林が本制度へ積極的に参画し、明るい将来への展望へ繋がることを期待したい▼小生も国有林生活の40数年があっという間に過ぎ、残り数ヶ月の現職生活となった▼伐期を迎えた老木が今後どのようなようにして世間の役に立っているのか自問自答している今日この頃である。

(つ)